

弟の死と日英友好の崩壊

長崎居留地
ドキュメント
ブライアン・パークガフニ

24

マイケルの悲しみ

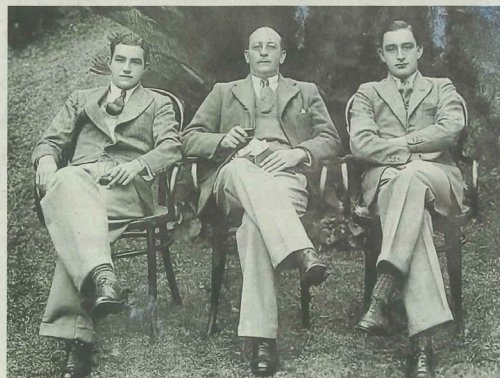
イギリス人豪商フレデリック・リングガの次男シドニーは、大正2(1913)年にアイリーン・ムーアと結婚して美家の南山手2番館に入居した。今やグラバ―園に現地保存されている国指定重要文化財の旧リンガー住宅である。同年と大正5(1916)年、長男マイケルと次男ヴァーニヤはそれぞれ長崎で生まれた。少年時代を日本で過ごした兄弟は、イギリスの名門



少年時代のマイケル・リングガ(写真はイギリスの雑誌「ニートン」に掲載)

学校マルバーン・カレッジにおいて伝統的な教育を受けた。卒業後、2人とも日本へ戻り、ホーム・リングガ―商会の後継者として新しい生活を始めた。若い兄弟は旧長崎居留地に新風を吹き込み、祖父が開設していた会社の活動に新たな期待を呼び起こした。父シドニーの不在時は、英国領事代理およびオランダ、ノルウェー、スウェーデンとポルトガルの名譽領事の任務も受け持った。

長崎原爆にも心痛める



リンガー家の庭師、富田幾太郎の義理の娘、富田純子さんによると、地元の女の子たちは美男子のマイケルとヴァーニヤが近くを通り過ぎるたびにうっとり見とれていたという。家族アルバムの写真には、日本人の友人たちとポーズをとったり、会社の同僚たちと小旅行を楽しんだりする姿が写っている。昭和12(1937)年にヴァーニヤがイギリス人女性アルネラと結婚した際には、多くの関係者が南山手の邸宅に集まり、家族の祝賀会に参加した。

しかし、太平洋戦争の暗い影が忍びよる昭和15(1940)年兄弟は突然、日本に滞在する他の英米人ビジネスマンたちと共に、軍機保護法違反で拘束され、国外退去命令に等しい執行猶予付きの判決を受けた。その頃、ヴァーニヤとアルネラ夫妻には、エリザベスという3歳の娘がいた。釈放されたマイケルとヴァーニヤは間もなく中国へ渡り、マイケルは諜報将校、ヴァーニヤはパンジャブ大隊の中尉として英国インド軍に入隊した。同じ頃、両親のシドニーとアイリーンは長崎を後にして上海に逃れた。彼らの海外避難や明治元(1868)年から地域経済に貢献してきたポム・リングガ―商会の解散は地元紙に一切報告されなかった。

戦時中、ヴァーニヤはマレー半島におけるスリム川の戦いで戦死し、マイケルはインドネシアで日本軍に捕まえられ、終戦まで捕虜収容所で過酷な日々を過ごした。マイケルは戦後に解放されてから初めて弟の死を知った。少佐の階級にまで上り詰めていた彼は、終戦の翌年に行われた極東国際軍事裁判(東京裁判)で証言するよう命じられた。50歳に及ぶ彼の証言録に、憎しみや恨みが全く見られないのは印象的である。マイケルは最愛の弟を失ったことだけでなく、日英友好の崩壊と長崎への原爆投下による惨状に深く心を痛めていた。その後、マイケルはイギリスに戻って弟の未亡人アルネラと結婚し、酪農場を経営しながらヴァーニヤの遺児を育て、年老いた両親の面倒を見た。昭和53(1978)年にこの世を去るまで、生まれ故郷の長崎に戻ることはなかった。

(グラバー園名誉園長)

月1回掲載します



長崎の自宅でくつろぐリンガー親子。左からマイケル、シドニー、ヴァーニヤ。昭和8(1933)年。東京裁判で英米の証言に答えるマイケル(左)